

成果の説明書

(氏名)笠見弥生	(学部)経済学部
<p>1 重要事項</p> <p>【研究】</p> <p>明末の文人凌濛初による短篇白話小説集『拍案驚奇』及び『二刻拍案驚奇』、通称「二拍」についての研究を行う。</p> <p>本年度はこれまでの自身の研究成果を総合し、(一)形式、(二)作品から読み取れる作者の思想という二つの視点から「二拍」の特徴について改めて考察し、今後研究を進展させていくための土台作りに努めた。</p> <p>・口頭発表</p> <p>2019年8月 「短編白話小説の「語り物らしさ」中国古典小説研究会 2019年度大会、開催校：九州大学</p> <p>概要：</p> <p>凌濛初「二拍」の形式面での特徴を考察するため、短編白話小説の先行作であり、凌濛初自らが作品を編む際の手本としたと言明している馮夢龍の「三言」こと『古今小説』、『喻世明言』、『醒世恒言』との比較を行った。当時の白話小説は講釈師が語る語り物の形式を模した語り口が特徴である。従来の研究において、「三言」は小説の読みやすさを追求し、語り物らしい要素を削減する傾向があることが指摘されていた。それに対して「二拍」は敢えて講釈師らしい饒舌な語りを随所に挿入し、より語り物らしい雰囲気や「二拍」は演出しようとする傾向と、読み物としての読みやすさを追求しようとする傾向が共存しているように見える。こうした特徴から、文人たちが「語り物らしさ」、つまり市井の芸能の生き生きとした様子を紙面に再現しようとするほど却って乖離していくという中国小説の文体の発展における事象について、日本語で発表を行った。</p> <p>【教育】</p> <p>本年度は「中国語Ⅰ」「中国語Ⅱ」「中国古典研究」「日本語リテラシーⅠ」の四つの授業を担当した。</p> <p>「中国語Ⅰ」「中国語Ⅱ」では、中国語の要とされる発音について重点的に指導を行い、授業中に繰り返し発音練習、音読練習を行う機会を設けた。同時に小テストを頻繁に行い、習熟度の確認と向上に努めた。</p> <p>「中国古典研究」では、中国文学はもちろん、古典にもあまりなじみのない学生が多く受講しているため、日本文学、或いは日本人になじみのある作品を多く選び、中国の小説の歴史を辿りながらいくつかの作品を授業内で講読した。</p> <p>「日本語リテラシーⅠ」では、共通のシラバスに沿って「聞く」、「書く」、「読む」の三つの力の醸成を目的として授業を行った。一年生必修の授業であり、少人数でクラスメイトとディスカッション等を行う機会が多く設けられているため、学生が発言しやすい雰囲気を保てるよう気を配った。</p>	
<p>2 その他の事項</p> <p>2020年4月～ 高崎経済大学経済学会理事</p> <p>2020年4月～ 日本中国学会広報委員会幹事 等</p>	

3 次年度以降の計画・抱負

【研究】

本年度はこれまでの自身研究の見直しや情報収集に多くの時間を費やした。次年度はこれらの成果を改めて一つの形にまとめる作業を行い、凌濛初「二拍」が明清の小説史においてどのように位置づけられるかを考察する。

【教育】

授業については、本年度担当した「中国語Ⅰ」「中国語Ⅱ」「中国語古典研究」「日本語リテラシーⅠ」に加え、「中国文化論」を新たに担当する予定である。

「中国語Ⅰ」「中国語Ⅱ」について、現在使用中の教科書が出版からだいぶ時間が経ち、内容にところどころ古さが見える。また本学で開講される他の外国語や他大学の中国語に比べて進度がやや遅いようにも見受けられる。次年度は教科書や進度の変更について、他の担当者の意見を取り入れながら検討する予定である。また、授業中に会話練習等を行う機会を増やす等して、学生の達成感やモチベーションをあげる工夫をしたい。

「中国古典研究」について、中国史の知識があまりない学生も少なからずいたため、中国の歴史と照らし合わせながら作品を講読できるよう、資料配布等授業の充実をはかる。中国の古典の魅力をより多くの学生に伝えていきたい。

新たに担当する「中国文化論」では、中国の古典小説を講読する「中国古典研究」と差別化をはかり、『論語』等中国の思想に関する文献を紹介する予定である。日本の文化にも大きな影響を与えた文献が多いため、日本の歴史や文化とのつながりを意識してもらえるよう講義を行う。